

Card Magic Magazine



No. 3

July 1, 2012

by Hideo Kato

カードマジック徹底研究

ジェミニツイン

Part 1 ジェミニツインのエッセンス

マジシャンがディールすべきか、客にディールさせるべきか？

’ジェミニツイン’は、セルフワーキングトリックの最高傑作であるだけでなく、すべてのカードマジックの中でも、一般の観客に対して効果のあるものとして、トップレベルのものです。私自身も娘の結婚式で、お客様のテーブルをまわって結婚式用にアレンジしたものを演じて、私がマジックを演じてきた経験の中でも、最高の反響を得たものです。

今回この大傑作について徹底研究するにあたり、原案者のカール・ファルブズが“More Self-Working Card Tricks”(1984年)に書いたものを確認しようと再読して、「あっとびっくり」してしまいました。いままで色々な機会に私が書いてきた’ジェミニツイン’のやり方が、ファルブズが書いたものと決定的に違っていたのです。

私の解説では、客がよくシャフルしたデッキを受け取ったあと、マジシャンがずっとカードを操作して演じるのです。すなわち、マジシャンがディールして客がストップをかける、そしてそこへマジシャンが表向きのカードを置く、最後もマジシャンがデッキをリボンスプレッドして、2組のペアを抜き出します。ファルブズはどのように書いているか、原案の解説の現象説明を忠実に翻訳いたします。

この素晴らしいトリックは、最初から最後まで客の手によって進められます。客にカードをディールさせるのですが、マジシャンは、マジシャンが心の中で命ずるときにストップさせられると宣言します。

マジシャンはデッキから2枚のカードを抜き出してテーブルに表向きに置きます。それらが赤の5と黒の8であると仮定します。それからデッキが客に渡され、客がトップから1枚ずつディールしていき、好きなところでストップします。ディールされたカードの上に赤の5が置かれ、その上に残りのカードが置かれます。客はまたカードをディールして好きなところでストップし、黒の8をディールされたカードの上に置いて、その上に残りのカードを重ねます。

それから客自身がデッキを広げると、赤の5の隣りのカードがもう1枚の赤の5で、黒の8の隣りがもう1枚の黒の8なのです。借りたデッキで演ずることもできますし、客によくシャフルさせてから演じることができます。しかもマジシャンがデッキに手を触れないでできるのです。

このようにファルブズは、カードを客に操作させることが、このトリックの肝(きも)であると強調しています。マイケル・クローズやピーター・ダフィなども、このトリックのバリエーションの解説において、ファルブズ同様にその点を強調しています。

そこで'ジェミニツイン'徹底研究の幕開けとして、客に操作させるか、それともマジシャン自身が操作するか、ということをご考察することにいたします。

客に操作させてやるのが適切な状況があるとしたら、バーマジックやフレンドリーな状況で少人数相手に見せる場合、すなわち見せる側と見る側が向かい合っている状況だと思えます。

それに対して私が結婚式で演じたように、ひとつのテーブルで7、8人のお客様いるような状況、もしくはそれ以上の観客がいるような状況でのことを考えてみましょう。そのような状況は、私はただカードトリックを見せるという以前に、エンタテイナーとして感じよくアクトを行うということに気を使います。そのようなことを重視すると、客にデッキを渡して操作させるのは格好よくないのです。

客にデッキを渡して、「1枚ずつカードを置いていってください。そして好きなところでストップしてください。そうしたらそのカードをそちらに置いて、残りのカードを上重ねてください」と指示しなくてはなりません。客にやってもらうことを理解してもらうために、客に神経を使わせることになりまして、間違いなくやってもらうために、操作を指示するという行為が演技のスムーズさとスマートさの邪魔になります。

それよりも、「このようにカードを置いていきますから、好きなところでストップをかけてください。ではここにこのカードを置きますよ。そしてカードをそろえます」と自分でやった方が、テンポよく進みますし、シンプルな動作になるので、どのようなことが行われたのか、観客に理解しやすいものとなります。

そして客に最後まで扱わせることの致命傷は、ドラマチックな結末が起こるのが正面でなく、右とか左にいる手伝いの客の前で起こることです。それよりも演技者の正面で、2組がマッチングペアであることを演技者の手で現した方が、恰好よくポーズを決められるのです。

舞台芸では「出」と「引っ込み」が大切だと言われますが、カードマジックをショーとして演ずるなら、そこまで考えるべきです。

では1人相手に'ジェミニツイン'を見せる場合、私は相手に操作させてやるでしょうか。絶対にやりません。それは1人相手でも、前述のことが当てはまるからです。私は2005年のMr. マリック博品館公演の際、'ジェミニツイン'の解説が含まれた商品の販売にたずさわり、おそらく100回以上実演し、相手に操作させるのと自分で操作するのを試しましたが、あきらかに自分で操作させた方がリアクションがよいと結論を得ています。

ジェミニツインの演じ方の再復習

私は“Cardcian’s Journal” No.102 で、“ジェミニツインの復習”と題して、標準的な演じ方を説明しました。その中でもっとも重要なこととして、つぎのように書いています。

このトリックにおけるセリフの肝は、最初からダイヤの5の双子の相手がハートの5だと言わないことです。最初からそれをはっきり言ったのでは、たんにダイヤの5とハートの5が出てきたという、物理的現象になってしまいます。

この考え方をさらに突き詰めると、もっとインパクトの強い不思議さを生み出せるのではないかと思い当たりました。前述の“ジェミニツインの復習”での説明では、「ジェミニの星のもとに生まれた双子は、お互いに強く引き合うパワーを持っているといいます。それをカードを使ってお見せしましょう」というセリフで演技をスタートしています。

その冒頭のセリフを割愛し、双子の話を結末部分でまとめて語るのです。カードを操作しながら分散して話していたことを、まとめて話すことによって、一気にドラマを盛り上げる働きをするのではないかと考えたのです。そのやり方を説明します。

客にシャフルさせたデッキを受け取り、「2枚のカードを使います」と言って、なるべくスムーズに2枚を抜き出します。ディール&ドロップの操作を2枚の表向きのカードに対して行います。そしてデッキをリボンスプレッドします。ここまでストーリー的な話はいっさいしません。

「じつはこのマジックは、双子に関するマジックです。双子はお互いに引きつけ合うパワーを持っています。これらの2枚のカードは、あなたがよくシャフルしたカードの中の、しかもあなたがストップをかけたところに入れられました。どんな結果になっているか見てみましょう」と言って、2組のペアを抜き出して前に置きます。スプレッドは閉じてわきに片づけてしまいます。

片方の表向きのカードを指さして、「このカードの双子の相手は、何のカードだと思いますか」と問いかけ、相手がすぐ答えなければ、「同じ色で同じ数のカードです」とヒントを出し、双子のカードを言わせてから、ペアのカードを表向きにして、「ほら、双子のカードです」と言います。

もう1組の表向きのカードを指さし、「このカードの相手は何でしょう」と言えば、相手はすぐ答えるでしょう。「そうです、クラブのJです」と言って、それを表向きに返します。左右の手で左右のペアをさしながら、「本当に双子には、不思議なパワーがあるのです」と言って、終わります。

標準的な見せ方のように、最初から双子のことを話してしまうと、話が分散してしまうことと、最初から双子の話をすることが、結末を想像させてしまう可能性がある、ということは今思い当たりました。実際にはそれほどの違いはないかもしれませんが、話を後半に集中させるという見せ方があることの発見は価値があると思います。

Part 2 デール&ドロップ

‘ジェミニツイン’では、デールされたカードの上に下半分をのせると、最初のボトムカードがテーブルのパイルのトップカードにくっつくということと、最初のトップカードがつぎにはボトムカードになるために、同じことが2回行われるということが巧妙に働いています。この操作の中に含まれている原理について考察しておきましょう。

この操作の呼称については、ジャック・カーペンターが“Expert Portfolio No.1”(1997年)の中の‘A Potent Presage’というカードマジックの解説の後書において、つぎのように書いています。

カードをデールしてストップさせ、その上に1枚のカードを表向きにのせさせ、それらの上に残りのカードを重ねさせることによって、表向きのカードが特定のカードと隣り合わせになるというプロセスは、“Deal and Drop”と呼ばれており、その起源は明確にたどれない古いものです。

私が見つけた中で、デール&ドロップの使われたもっとも古い作品は、“Jinx No.33”(1940年3月9日)に書かれている、ハーブ・ランジーの‘Hidden Mystery’です。現象は‘ジェミニツイン’とは異なりますが、デール&ドロップ使用の先例として記録しておきます。

ヒドゥンミステリー

Card magic Monthly No.24

= ハーブ・ランジー、“Jinx” No.83、1940年3月9日 =

* 準備 *

あるカードのデュプリケートカードを2枚余分に使います。たとえばダイヤの5を使うこととします。すなわちその2枚を密かに加えると、デッキにはダイヤの5が3枚あることとなります。1枚をボトムから2枚目に表向きに、1枚をトップに、そして最後の1枚を中央あたりに入れておきます。

* 方法 *

デッキを表向きに広げて(リバースしたダイヤの5を露見させないように)、中央のダイヤの5を抜き出して、表向きにテーブルに置きます。そのあとデッキを裏向きにしてからボトムの1枚を何らかの方法でボトムからどけます。結果的にトップとボトムにデュプリケートのダイヤの5があり、ボトムのはリバースしています。

1人目の客に1から20の間の数字を言わせ、その枚数をデールします。最後にデールされたカードの表を見せておぼえさせ、その上にデッキをのせます。同じことをもう1人の客に行います。

デッキを左手に持ち、右手に表向きに置いてあったダイヤの5を持ち、両手を背後に運びます。ダイヤの5をデッキの中に入れると、お尻のポケットに入れてしまいます。デッキを前に出し、リボンスプレッドします。表向きのダイヤの5が見えますから、それとその下のカードを抜き出し、1人目のカードを名乗らせてから、そのカードを表向きにします。

同じようにデッキとダイヤの5を背後に運び、ダイヤの5を尻のポケットにしまいます。そしてデッキを1回カットしてから前に出します。

リボンスプレッドしますが、こんどは表向きのカードがありません。「失礼、逆向きに入れてしまいました」と言って、スプレッドを表向きに返します。2人目のカードを名乗らせ、ダイヤの5を見つけ、その隣りにそのカードがあるのを見せます。

Part 3 フォーオブアカインドバージョン

このあと、'ジェミニツイン'の現象のバリエーションや、現象は異なるがディール&ドロップを用いた作品を収録するわけですが、最初に取り上げるのは、2組のマッチングカードではなく、2枚の同数カードを表向きにデッキの中に入れて、あと2枚の同数カードを見つけ、結果としてフォーオブアカインドを現すという現象です。

クアドラプレット

= 加藤英夫、マジックカフェ、2003年8月30日 =

* 方法 *

フォーオブアカインドを現すわけですから、双子の話はできません。たんに「2枚のカードを使います」と言って、スタートします。シャフルされたデッキを受け取り、表を自分に向けて広げていきますが、トップカードをグリップスして、それと同数カードをフェースにカルし、さらにそのあと出てくる2枚の同数カードをテーブルに表向きに抜き出します。それら2枚を使って'ジェミニツイン'と同じ操作をやって、フォーオブアカインドを現します。

技法 ムーバブルカードパス

エドワード・マルロー、"New Tops"、1969年3月号

'クアドラプレット'において、8のカードをカルするものとして説明します。

デッキの表を自分に向けて、カードを左から右へ送っていきますが、左手は位置を変えずに親指でカードを送り出してやり、右手が左右に往復運動をしてカードを受け取っていきます。その往復の動作がカルをカバーしてくれるのです。

最初の8が見えたら、その8の左サイドに左親指を当てて、図1、



右手を左に運ぶと同時に、8のカードを左親指で左に引きます。図2。右手を右に置いたまま8を左に引くと、観客からそのカードの裏面が動くのが見えてしまいます。右手の指先でその動きをカバーするために、右手を左に運ぶのです。それは見かけ上は、つぎのカードを右に送る動作となります。



続けて、8の後の数枚の右上コーナーを右人さし指で押さえ、右手を右に運ぶときにその数枚もいっしょに右に運びます。8のカードはそのままの位置に保ちます。そうすると、8のカードが外れます。図3。



また右手を左に運ぶとき、8のカードを右手のカードのフェースの手前にすべり込ませます。図4。あとは必要なカードを見つけるべく、カードを送っていきます。そして目的の数のカードを2枚抜き出します。



もしも目的の数のカード2枚が数枚以内にあった場合は、1枚は無視して進め、そのあとの同数カードを見つけたあと、まえに戻ってそのカードを出すようにします。

Part 4 3組マッチング

トリプルコインシデンス

ニック・トロスト、“New Tops”、1989年7月

ジェミニツインの原案では2組のペアが現れますが、もっと多くのペアを現したいと考えるのは、クリエイターなら当然の考え方です。ニック・トロストもファルブズの原案にもとづいて、3組現すようにしたと明記して、この作品を書いています。

* 方法 *

表を自分に向けてデッキを広げ、トップ2枚とボトム1枚を認知します。もしもそれらのうちに数の同じものがあれば、カットして違う数がある位置になるように変えます。

トップ2枚とボトムカードをグリプスしたあと、それら3枚のマッチングカードを抜き出してテーブルに表向きに置きます。ボトムカードとのマッチングカードを左に、トップから2枚目とのマッチングカードを中央、トップカードとのマッチングカードを右に置きます。つねにその順番で置くと決めておけば、ディーリング&ドロップのときに、左、中央、右の順で置けばよいのです。

1人目に対してディーリング&ドロップを行います。左のカードを置きます。そしてデッキを取り上げ、ボトムカード1枚をトップに移すようなカットを行います。それにはボトムカード1枚をトップにまわしたあと、まん中からカットして上にまわしてブレイクを保ち、ブレイクからカットすればよいのです。

そのあと中央のカード、右のカードの順で、あと2人に対してディーリング&ドロップを行います。デッキをリボンस्पレッドして、3組のペアを抜き出し、それらがマッチングペアであることを見せます。

誰でもマジシャンになれる

= 加藤英夫、2012年6月6日 =

トロストの3組マッチバージョンは、書き残すべき作品としての完成度を感じませんでしたが、私の知るかぎりでは、2組マッチより多くマッチさせる初めてのバージョンなので、記録に残すことにしました。完成度が低いというのは、途中でデッキをカットすることに他なりません。カットしてよいのなら、極端な話、クリンプを併用すれば、何組でもマッチさせることができます。

これから説明する3組マッチのやり方は、のちに解説するダフィの4組マッチのやり方から、セカンドディーリングの必要な部分を取り除いただけですが、3組マッチさせたい状況においては適切なやり方なので、収録することにいたしました。

* 方 法 *

シャフルされたデッキの表を自分に向けて広げ、ボトムカード、トップカード、トップから7枚目のカードと同色同数のカードを抜き出して、表向きにテーブルに置きます。その順で左から右に向かって置くことに決めておいた方が、あとで取る順を間違うことはありません。なお、トップから7枚目が他の2枚と同数である場合は、トップから6枚目でも8枚目でもかまいません。以下の説明は7枚目のマッチカードを抜き出したものとして説明します。

「じつを言うと、皆さん誰でもマジシャンになれる素質を持っているのです。そのことをあなたとあなたに手伝ってもらって試してみたいと思います」と、手伝ってもらう2人に向かって言います。

「最初は私が手本を見せますから、よく見ていてください。カードをこのように置いていって」とここまで言うまでに、3枚のカードをディールします。「好きところでストップしてください」と言って、あと3枚ディールしたらストップして、「私はここでストップします。もっとたくさん置いてからストップしてもかまいません。そして置いたカードの上に表向きのカードをのせます」と言って、表向きのうちのいちばん左のカードをディールされたカードの上にのせます。「そうしたら、手に残っているカードを上重ねてそろえます」と言って、セリフ通りにやります。

1人目の客に同じようにやらせます。表向きのカードは2枚のうちの左のをのせさせます。そのあと2人目の客にやらせます。

以上で3人の作ったペアはすべてマッチングペアになっています。デッキを裏向きにリボンスプレッドして、ここで双子の話をしします。3組のペアを前に抜き出したあと、「もしもマジシャンの素質があるなら、うまく双子を見つけることができたはずですよ」と言って、3組のペアを見せます。「お二人ともマジシャンになる素質があることがわかりました」と言って終わります。

ポテントプレセージ

= ジャック・カーペンター、"The Expert Portfolio No.1", 1997年 =

これは私が今回収録した中で、'ジェミニツイン'のバリエーションとして、もっとも素晴らしく、もっとも演技価値のある作品だと感じた作品です。

* 準 備 *

あらかじめ7のカードを1枚、カードケースに残した状態でこのマジックを演じます。

* 方 法 *

相手によくシャフルさせたデッキを受け取り、予言のカードを何枚か出すと言って、表を自分に向

けて広げ始め、7のカードが出てきたら、その7がトップ（バック）から3枚目にいくようにカットします。トップから2枚目になったカードが何であるか認知します。そのカードを予言ペアaとびます。そして「1枚目の予言カードは〇〇の××です」と、予言ペアaと同色同数のカードを告げ、そのカードを抜き出して表向きにテーブルの左の方に置きます。そのカードを予言カードaと呼びます。

ふたたびカードを広げてつぎの7のカードを見つけ、その7とその左の1枚を抜いて、トップに移します。そしてトップカードになったカードを認知します。これを予言ペアbと呼びます。「2枚目の予言は〇〇の××です」と、予言ペアbと同色同数のカードの名前を告げ、そのカードを抜き出して、表向きにテーブルのまん中に置きます。

3枚目の7を見つけ、その7とその右のカードををデッキのフェースに移します。そしてフェースにきたカード（予言ペアc）と同色同数のカードの名前を「3枚目の予言は〇〇の××です」と告げ、そのカード（予言カードc）を抜き出して表向きにテーブルの右の方に置きます。カードをそろえて裏向きにします。

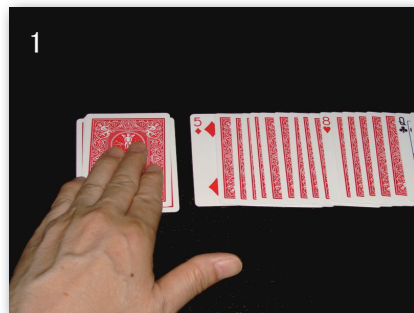
現在の状態は、テーブルの左から表向きに、予言カードa、予言カードb、予言カードcと並び、デッキの方はトップから、予言ペアb、7、X、予言ペアa、7、、、、そしてボトムから2枚目が7で、ボトムが予言ペアcとなっています。

デッキをテーブルの予言カードcの手前に置きます。相手にカードを上から3分の2ぐらい持ち上げさせ、予言カードbの手前（マジシャンから見て）に置かせます。さらにそのポケットから半分ぐらいカットさせ、予言カードaの手前に置かせます。

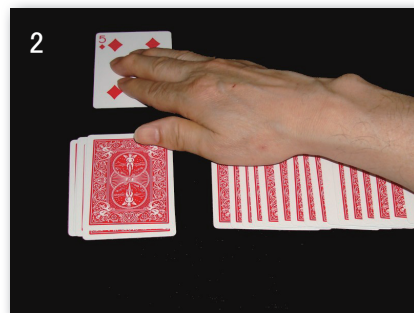
左端の予言カードaの手前のポケットを取り上げ、「このようにカードを1枚ずつ置いていって」と言いながら、3枚のカードをディールします。「好きなところでストップして、このように予言カードを上置き、残りのカードをいちばん上に重ねてください」と言って、予言カードをディールした3枚の上へのせ、手元のカードをそれらの上に置く真似をしますが、予言カードをもとの位置に戻し、手元のカードをディールした3枚のカードの上に重ね、それからそのポケットを相手に持たせます。

相手に指示通りやらせます。中央のポケット、右端のポケットでも同じことをやらせます。そのあと、右のポケット（マジシャンから見て）を中央に重ねさせ、それらを左端のポケットに重ねさせます。

カードをリボンスプレッドします。「予言のカードのところからカードを分けます」と言って、いちばん左の表向きのカードの左で分けてから、図1、



表向きのカードを左分けたパケットの前にずらしませう。図2。



つぎの表向きのカードの左で同様にカードを分け、表向きのカードを同様に左に分けたパケットの前にずらして置きます。

最後は違った分け方をします。スプレッドを手にとって、表向きより上のカードを分けて、そろえてテーブルに置きます。まえに置いた2つのパケットの右に置きます。そして表向きのカードをその前に置きます。手に残ったカードはわきに捨てます。

予言のカードは相手が好きな位置に入れたことを強調します。それから各パケットを表向きにします。フェースに現れたカードは、それぞれのパケットの前に置かれている予言カードとマッチしています。

各パケットを手に取り、裏向きにしてボトムカードを抜き取り、マッチするカードの上に表向きに置いていきます。各パケットは裏向きにもとの位置に置きます。

いまや各パケットのボトムに7のカードがあります。「いま3つの予言が当たったことをお見せしましたが、もっとすごいことが起こっているのです。最終的な予言がこの中に入っています」と言って、カードケースを指さします。そして7のカードを取り出して表向きに置いてから、各パケットを表向きにします。

* 備考 *

私は説明を読んでいる途中で、予言のカードと隣接することはあり得ない、中央のパケットについてはどのように対処するのだろうかと疑問に思いました。その解決法を読んで、じつに巧妙なやり方だと感心しました。

しかしながら、パフォーマンスするマジックとして、私が許容できない致命的なことがあります。それは、3つのパケットを重ねて、それからまた分けるという操作です。つぎのように変更することによって、その大きなマイナスポイントを解消できると思います。

相手に操作させるとき、2つ目と3つ目のパケットについては、別のパイルにディーラーさせるのではなく、1つ目のパイルの上にディーラーさせて、つぎつぎと重ねさせていくのです。そ

のようにすれば、そのあと表向きのカードで分けることが、不自然な操作ではなくなります。

また、カードケースに1枚の7を残してデッキを取り出すということは、7をケースに残せる準備をしておく必要があります。そのような準備をしていない状態で演ずるには、つぎのようにやるとよいでしょう。

「つぎのマジックでは、予言のカードを抜き出しますが、まず究極の予言カードを抜き出します」と言って、7のカードを抜き出して表を見せないでケースの中に入れます。「あと3枚の予言カードを抜き出します」と言って、原案通りに進めます。

最初からこのマジックを演ずるつもりなら、7を1枚ケースに残したまま他のマジックを演じ、それからこのマジックを演ずれば、最大の効果を発揮すると思います。

Part 5 4組マッチング

シティスリッカーズ

= ピーター・ダフィ、"Duffie's Card Compulsions"、1995年 =

トロストバージョンのように、3枚のカードをマッチさせて現すという現象は、たんに'ジェミニツイン'の単純な拡張ですが、4組をマッチさせることには、現象および演出において、明らかな発展があります。それは4枚のフォーオブアカインドを使って、それら4枚とマッチするフォーオブアカインドとペアにして現すという現象です。

そのようなやり方には、それなりの実演価値があります。それは4組のペアを現したあと、それら4組のペアを使って、つぎのトリックに連鎖させるという演じ方ができることです。

* 方法 *

デッキを表向きに両手の間に広げていき、4枚のKを抜き出していきますが、そのとき密かに4枚のQをバック（トップ）にカルします。4枚のQの順番を記憶し、それがダ・ク・ハ・スであったとしたなら、テーブルに抜き出した4枚のKの順番を表向きの上からダ・ク・ス・ハとします。すなわち、リバースオーダーでおなかつ3枚目と4枚目が入れ替わった順にします。

デッキを裏向きにして持ち、適当なことをしゃべりながら、トップカード（QC）をボトムにダブルアンダーカットしてまわします。

デッキをテーブルに置き、つぎのようにリフルシャフルします。上半分を左に置き、右のボトムカードを先にリフルします。ふつうにリフルしていき、左の方に数枚（3枚以上）残っている状態で、

右手が残り5枚になったら、左手はトップの1枚を残してすべてをリフルし、右手の5枚を全部リフルして、そして最後に左手の1枚をリフルします。これによってトップからQ、X、X、X、X、X、Q、Q、、、そしてボトムが残りの1枚のQとなります。

「これからKが町に出かけて行って、好みの女の子を見つけます」と言って、デッキをディーリングポジションに持ち、「あなたにもあとで同じことをやってもらいますので、よく見ていてください」と言って、カードをディーリングして6枚置いたら止めて、「このように置いて行って好きなところで止めます」と言います。相手にクラブのKをディーリングしたカードの上に表向きにのせさせます。「残りのカードを上へのせます」と言って、残りのカードをその上へのせます。

相手にデッキを取り上げさせ、指示どおりやってもらいます。相手がストップしたら、あなたがハートのKをディーリングされたカードの上に表向きにのせ、残りのカードをその上へのせさせます。

デッキを取り、「これで2人は町にもぐり込みました」と言いつつ、ボトムディーリングを行います。そのあとつづに10枚ぐらいディーリングし、相手にスペードのKを表向きにのせてもらいます。残りのカードをその上へのせてそろえます。

相手にデッキを取らせて、同じことをやらせます。相手が止めたらハートのKを表向きにのせ、残りのカードをその上へのせさせます。

カードを裏向きにリボンスプレッドします。Kと右隣の裏向きのカードをペアで抜き出します。4枚抜き出したらスプレッドを閉じます。そして各裏向きのカードを表向きにして、ペアがマッチしたことを見せます。

* 備 考 *

ピーター・ダフィがこのバージョンを発表する1年まえに、アラン・アッカーマンが'Las Vegas Kardma'において、'マイフェイバリットジェミニ'というバージョンを発表しています。ダフィがセカンドディーリングによってボトムにある2枚のうちの1枚をディーリングするという手口を使っているのに対し、アッカーマンはつぎのように行うことによって技法を使うことを避けています。

相手がディーリング&ドロップしたあと、デッキをテーブルに置かせ、そのデッキを手前に引いて取り上げるとき、いかにも取り損ねたかのごとく、ボトムカード1枚をテーブルに残してきます。そしてそのカードを取ってトップに置きます。

ダフィはアッカーマンのやり方を読んで、そのやり方の代わりにボトムディーリングを使うことにしたのでしょう。他の部分はほとんど違いありません。もしかしてダフィは私が感じたのと同じように、アッカーマンのやり方があまりにもよくないと感じたかもしれません。技法が省けるとし

でも、そのようなやり方は御法度です。

なぜなら、たとえボトムカードを取り損ねたという表現をしたとしても、観客の目には、1枚のカードを上まわしたということは明白に見えるからです。まだトロストのように、カットでボトムからトップにまわす方がましです。カードを混ぜるという口実があるからです。いずれにしてもセカンドディールを使うことがベストです。見かけ上は、何もやっていないのですから。

技法 ファーストオンリーボトムディール

ボトムディールのやり方の解説というものは、ノーマルなディールの途中でボトムから取ることを前提に考えられています。ダフィの'シティスリッカーズ'のように、デッキを取り上げて最初の1枚をディールするときだけボトムディールするやり方は、とくに解説している書物を見たことがありません。私が考えたものではありませんが、考案者の名前をつけずに解説しておくことにいたします。

* 方法 *

デッキを右手で取って左手に渡すとき、左指先でボトムカードを右に少しずらし、同時にデッキ全体を右にビベルさせます。そしてずらしたカードをデッキ右サイドに沿わせます。

いかにもトップカードを取る感じで、右中指の先をボトムカードの右上コーナーの下から当てて、図1、ボトムカードを抜き取ってディールします。図の点線は取られるまえのボトムカードの状態を示しています。



四つ子の王様

= 加藤英夫、“カードマジックショーアップ講座”、2004年2月1日 =

このトリックには、'マルチプルディール&ドロップ'とも呼ぶべき手法が使われています。いくつかの組にディールしたあと、パイルを重ねることによって、ひとつの組のボトムカードが隣の組のトップカードにつぎつぎと隣接することを利用するのです。

* 方法 *

シャフルされたデッキを使います。カルが不得意の方は、トップに3枚とボトムに1枚Qをセットして演じてください。

4枚のKを出しながら、4枚のQをバックにカルします。Qのトップからの順を記憶します。ダクハスの順だとします。

「ある国の王様に、4つ子の赤ん坊が生まれました。4人は結婚して4つの国の王様になることになりました。今日はあなたの協力で4人にふさわしい王妃を見つけてあげることにいたしましょう」というセリフを言いながら、デッキを裏向きに持ち、ダブルカットでトップのQをボトムに移します。

カードを4つのパイルにディールして、3枚ずつディールしたところで手を止めて、「これは4人のための領土です。どんどん置いていきますから、どこでもいいですからストップをかけてください」と言って、ストップがかかるまで4つのパイルにディールを続けます。

左のパイルから順に、ダイヤのK、クラブのK、ハートのK、スペードのKを表向きに置きます。そして手元のカードを左端のパイルに重ね、それらを取り上げて2番目のパイルに、それらを3番目のパイルに、そしてそれらを右端のパイルに重ねます。

カードをリボンスプレッドします。あとは各表向きのKと右隣りのカードをペアで抜き出して前に置きます。そして裏向きのQをつぎつぎと表向きにします。「それぞれふさわしい王妃を見つけることができました。めでたしめでたし」と言って終わります。

Part 6 両側タイプ

このPartでは、表向きに入れたカードの両側に目的のカードを現すバージョンです。最初に解説するものは、両側に現すトリックとして発表されたものではありませんが、備考で説明する通り、カードさえセットすれば、そのまま両側に現すことができるので、収録いたしました。

フィニス

= ロビン・ロバートソン、“Linking Ring”、1973年6月 =

‘ジェミニツイン’ とまったく同じことを、ディール&ドロップではなく、ヒンズーシャフルで行うやり方です。

* 方法 *

シャフルされたデッキを受け取り、2枚使うといって、トップカードとボトムカードのマッチングカードを抜き出して、2人の客に持たせます。

ヒンズーシャフルしますが、最初はトップの1枚だけを取ります。そして細かくシャフルして、まん

中より手前でストップがかかるようにします。ストップがかかったら、左手のトップに、もとのボトムカードとマッチするカードを持っている客にのせさせます。右手のカードをその上に重ねます。

またシャフルして、もう1人の客で同じことをやります。まん中を過ぎてはいけません。ジェミニツインと同じように結果を見せます。

* 備 考 *

このやり方を讀んだおかげで、つぎのやり方を考えつきました。

ボトムカードを手前に少しずらした状態でヒンズーシャフルを行います。ストップがかかったら、左手のトップにカードを表向きにのせてもらい、そのカードの下に左小指でブレークを作り、ボトムでずれているカードが、表向きのカードの下に入るように右手のカードを重ねるのです。

この技法を使えば、ジェミニツインと同じ現象を、入れられた表向きのカードの上のカードではなく、下のカードでできることになります。

さらにこの方法を利用すれば、表向きのカードの両隣りに現すことができます。トップとボトムに現すカードを2枚ずつセットしておけばよいのです。ペアを現すわけではないので、4枚のAなどのフォーオブアカインドを現すマジックとすればよいでしょう。

トップとボトムにセットした2枚ずつのAをトップとボトムに保ったままりフルシャフルしたあと、右手でヒンズーシャフルのためにデッキを持つとき、左人さし指でボトムカードを手前にずらします。ヒンズーシャフルでは最初の2枚を1枚ずつ取ります。相手に渡しておいたカードを表向きに左手のカードの上に置かせ、前述のように手前にずらしたカードを表向きのカードの下に入れながらそろえます。同じことをもう1枚の表向きのカードについて行います。結果を見せます。

ジェミニオープナー

= 加藤英夫、“Card magic Monthly” No.24、1998年2月4日 =

ディーラー&ドロップをフォーエースオープナーに応用したマジックです。

* 方 法 *

3枚のAをトップに、1枚のAをボトムにセットしておきます。

2枚の黒いJを抜き出して、表向きにトップにのせます。下に1枚の裏向きのカードをスチールして3枚をビドルポジションに持ちます。そしてトップカードの下にブレークを作ります。右手の3枚のうちのいちばん上の1枚をデッキのトップに取り、そのように表向きのJが2枚見えた状態で「こ

の2枚のJで4枚のカードを見つけます」と言います。右手の2枚を左手のカードの上ののせ、ブレークから上の4枚を右手で取ります。4枚は1枚目と3枚目が表向きのJで、2枚目と4枚目が裏向きのAです。

デッキを相手に渡します。トップからカードをディールさせて、好きなところで手を止めさせます。その間にあなたは手元の4枚の上から2枚目の下にブレークを作っておきます。相手がストップしたら、ブレークの上の2枚をテーブルにディールされたカードの上に置きます。その上に相手の持っている残りのカードを置かせます。

デッキを取り上げさせ、またディールさせ、好きなところで止めさせ、ディールされたカードの上にあなたの手元の2枚をのせ、その上に相手の残りのカードをのせさせます。

デッキをリボンスプレッドします。表向きの2枚のJを指さし、「この2枚はあなたがストップしたところに入れました」と言います。表向きのJの両側を広げ、表向きのJとその両側のカード、合計3枚を抜き出します。もう一方のJについても3枚を抜き出します。裏向きの4枚のカードを表向きにして、4枚のAを現します。

* 備 考 *

この作品と同様に、前述の'フィニス'の備考で説明した、2枚の表向きのカードを使ってフォーオブアカインドを現すという現象では、たんに意味のない2枚でフォーオブアカインドを現しても、ストーリー的には面白くありません。

無味乾燥な操作に面白さを与えるひとつの手法は、ひとつのトリックをつぎに演じるトリックの前段として演じることです。このトリックで2枚のQで4枚のKを現してから、"Card Magic Library" 第1巻、149ページに解説の'ホテルモートルホリデイイン'を続けて演じれば、このトリックも生き生きとしたものになります。

ミッシングツイン

= 加藤英夫、2004年5月13日 =

* 準 備 *

12枚のカードの中に、ハートのAとダイヤのAを含ませておきます。2枚は隣接させておきます。その12枚とは別に、スペードのJを使います。

* 方 法 *

12枚を表向きに広げて、ばらばらのカードであることを言います。2枚の赤いAに注目させてはい

けません。

チャーリヤーシャフルなどを行い、結果的に赤いAがトップとボトムにいくように操作します。

金持ちの双子の娘が誘拐され、これから探偵のスペードのJが2人を見つけるというような話をします。

相手にカードを渡し、ディールさせて好きなところでストップさせます。ディールしたカードの上にスペードのJを表向きに置かせます。ここで「双子が見つかるようにお祈りをします」と言って、少し間をとります。手に残っているカードをテーブルのカードに重ねてもらいます。

もういちどディールして、スペードのJを置いたところでストップさせます。「双子のもう一人のためにお祈りしましょう」と言って、少し間をとります。そして手に残っているカードをテーブルのカードに重ねさせます。

カードを広げて、表向きのJと両側の、計3枚を抜いてテーブルに置かせます。両側のカードを表向きにして、双子が見つかったことを見せます。

*** 備 考 ***

このトリックが良いかどうかは別にして、2回のディール&ドロップの操作で、2枚のカードがロケーターカードの両側につくということを発見したことが収穫だったと思います。

当然のことながら、この手法は4枚のAなどのフォーオブアカインドを現すのにも使えます。

予言は正しい

= 加藤英夫、1999年1月16日 =

これはディール&ドロップの操作をテーブル上ではなく、ビドルポジションに持ったデッキから左手にカードを取るによって行うという、ハンドリングの変種です。ビドルムーブの機能も生かされて、表向きのカードの下にもカードを隣接することができる为生かされています。

現象的には、たんにフォーオブアカインドが出現することではなく、いったん予言が間違っているとかわせて、けっきょく予言が当たっているのを見せることに面白さがあります。

*** 準 備 ***

4枚の同数カードをボトムに2枚、トップに2枚セットしておきます。「同じ数のカードが選ばれる」という予言を書いた紙を用意します。

* 方 法 *

「ここにはこれから選ばれるカードが予言されています」と言って、予言の紙をテーブルに裏向きに置きます。

ボトムカードの上にブレイクを保持して、デッキを右手のビドルポジションに持ちます。左手にカードを引いて取っていき、相手にストップをかけさせます。「ストップがかかったところのカードを表向きにします」と言って、右手のトップカードを表向きにしながら左手のカードの上ののせるとき、ブレイクの下に1枚をそのカードの下にドロップします。右手のカードを左手のカードの上ののせてそろえます。

現在のボトムカードの上にブレイクを作り、まえとまったく同じやり方をします。すなわち右手から左手にカードを引いて取っていき、ストップがかかったら右手のトップカードを表向きに左手のカードの上に置きつつ、ブレイクの下にカードを加え、右手のカードを左手のカードの上に重ねます。

デッキをリボンスプレッドして、表向きの2枚を指さして、「この2枚はあなたが自由にストップをかけて選んだカードです」と言います。ここで予言の紙を相手に読ませます。表向きの2枚のカードが予言通り同じ数ではないので、ちょっと困惑した表情をします。

「いままで予言が間違ったことはありません。両側のカードを見てみましょう」と言って、それぞれ表向きのカードとその両側のカード、3枚ずつ2組を抜き出します。「これらはあなたがストップをかけた前後のカードです」と言います。スプレッドを閉じ、表向きの2枚を抜いて、デッキに戻します。「もういちど予言を読んでください」と言って、相手に予言を読ませたあと、裏向きの4枚を表向きにして、同じ数のカード4枚を現します。

* 備 考 *

4枚の同数カードを相手の目の前で堂々とセットするには、つぎのように行います。先に予言を書いてテーブルに裏向きに置きます。「予言されたカードが選ばれるように、カードを特別な順番にします」と言って、カードを並べ替える動作をしながら、同数の4枚をトップとボトムに運びます。4枚だけを移動するのではなく、全体的に並べ替えたように見せるのです。

このように、マジックによっては、「カードを特別な順番にします。そうすると不思議なことが起こります」というようなセリフによって、堂々とセットしてもおかしくない場合があります。

Part 7 サンドイッチタイプ

シャーロックホームズ対モリアーティ教授

= アルド・コロンビーニ、雑誌“リンキングリング”、1998年2月 =

この作品は、'ジェミニツイン'の手法を使って、相手が自由に入れた2枚のカードで目的のカードをはさむ手法の使われた例として紹介しました。

* 方法 *

2枚の黒いKを抜き出して表向きにテーブルに置き、それらがシャーロックホームズと助手のワトソン博士だと説明します。2枚のKを抜き出すとき、マークは何でもいいですから、6のカードをトップから3枚目にくるようにカットします。

1枚のカードを選ばせ、見ておぼえたらデッキに返させ、トップにコントロールします。さりげなくトップの7枚をオーバーハンドシャフルでランして左手に取り、その上に残りのカードを重ねます。それによって、6のカードはトップから4枚目に配置され、選ばれたカードは7枚目に配置されます。

容疑者を絞り込むと言って、デッキを表向きに持ち、フェースから少数枚ずつカットしてテーブルに置いていき、客に好きなところでストップをかけさせます。

ストップがかかったら、1枚のKを裏向きにして、テーブル上のカードの上ののせます。そして左手に残っているカードをテーブル上のカードの上に重ねます。

デッキを取り上げて両手の間に広げ、表向きのKを見せて、「このKはあなたが入れる場所を決めました」と言います。そのとき表向きのKのつぎから密かに数えて、7枚目のカードの下にブレークを作りながらカードを閉じます。そしてブレークを利用してダブルカットを行います。

こんどは裏向きのデッキで、上から数枚ずつテーブルに置いていき、客にストップをかけさせます。ストップがかかったら、テーブル上のカードの上にもう1枚のKを表向きにのせ、その上に左手に残っているカードを重ねます。

客の助力によって、ホームズとワトソンが何人かの容疑者を捕まえたはずだと説明し、デッキをリボンブレッドします。表向きの2枚のKとそれらにはさまっているカードを抜き出します。残りのカードはそろえてあなたの前に置きます。

相手に抜き出した9枚を渡し、容疑者を絞り込む操作をやってもらうと説明します。トップカードをテーブルに置かせ、つぎのカードをボトムにまわさせます。そのようにダウンアンダーをやらせ、

2枚目の表向きのKが置かれたときにストップをかけます。

置かれたカードを少し広げ、ホームズとワトソンの間のカードが3枚に絞り込まれたと説明します。そして客の手に残っている4枚をデッキの上に捨てさせます。

さらに容疑者を絞り込むと言って、テーブル上のカードを取り上げさせ、それでダウンアンダーをやらせ、2枚目の表向きのKが置かれたらストップをかけます。

テーブルの3枚を広げて、容疑者が1人に絞り込まれたと説明します。残りのカードをデッキの上に捨てさせます。表向きのKにはさまれている裏向きのカードを抜いて表向きにして、「これが選んだカードですか」と言うと、客は否定します。

「もちろんこれは犯人のカードではありません。ホームズという人は、いつもドラマチックな結末を用意します。この6のカードが犯人のいる場所を示しているというのです。そちらのカードを取り上げて、6枚のカードを数えて置いてください」と客に説明します。

選ばれたカードを名乗らせてから、6枚目のカードを表向きにさせます。選ばれたカードです。

ジェミニサンドイッチ・ギャフバージョン

加藤、2006年10月26日

ディール&ドロップでサンドイッチ状態を作るのに、'ホームズ&モーリアーティ教授'のように、デッキを表向きにして裏向きに入れるというのを避けたい、という発想からこの作品を考えました。

ビル・ゴールドマンのモンキーインザミドルは、デッキのトップで現象が起こるものですが、この作品ではデッキの中で現象が起こります。ディール&ドロップの原理が組合わせられて、客がデッキの好きどころに入れた2組の表向きのJの間に、2人の客が選んだカードが現れるという、ビジュアルな現象となっています。

* 準備 *

ダイヤのJとクラブのJの表面にラフ加工します。スペードのJとハートのJの裏面にラフ加工します。これら4枚をデッキに分散させておきます。デュプリケートのダイヤのJをトップから2枚目に表向きに、デュプリケートのクラブのJを表向きにトップから4枚目にセットしておきます。

* 方法 *

デッキを表向きに広げて4枚のJを抜き出して、テーブルに表向きにばらばらに置きます。トップ

近くのひっくり返っているJを見せないこと。

デッキを裏向きにして、表向きのJを見せないように広げて、1人目の客に1枚抜いてもらいます。相手はそのカードを見ておぼえている間に、トップから2枚目の下にブレークを作ります。客からカードを受け取り、ティルトで3枚目に入れ、3枚の下でダブルカットします。

つぎに2人目の客に1枚抜かせ、やはり2枚目の下にブレークを作り、その客のカードを受け取り、ティルトで3枚目に入れて、こんどは入れたカードの上にブレークを作ります。

カードを数枚ずつディールすると言って、トップの2枚重ねて取り、その下に3枚目を広げて取り、それらをテーブルに置きます。そのあとは適当に2、3枚ずつ置いていき、1人目の客にストップをかけさせます。ディールされたカードの上にダイヤのJをのせ、その上にハートのJをのせ、それらの上に手に残っているカードをのせます。ダイヤのJとハートのJはラフ面がくっつきます。

2人目に対して同じように、ディールしてストップさせ、ディールしたカードの上にクラブのJ、スペードのJを1枚ずつのせ、その上に手に残っているカードを重ねます。

リボン Spredd するとそれぞれ客のカードがサンドイッチになっているので、抜き出して選ばれたカードを現します。

ジェミニサンドイッチ

加藤英夫、2009年1月23日

* 方法 *

トップに2枚の赤いJ、ボトムに2枚の黒いJをセットしておきます。1人目の客にデッキを渡して、後ろ向きになります。ディールさせて、好きなところでストップしてもらいます。最後に置いたカードを見て記憶させ、その上に残りのカードを重ねさせます。2人目にも同じようにしてもらいます。

前に置き向き直り、「じつは4人の警官を張り込ませておきました」と言ってから、トップから表向きにディールしていき、黒いが現れたら、それを表向きに前に置き、つぎのカードをセカンドディールして裏向きに表向きのJにオーバーラップさせて置きます。つぎのJを表向きにして、まえの2枚にオーバーラップさせて置きます。

さらに表向きにディールしていき、同じことをやって、表向きの赤いJの間に裏向きのカードをはさんだ状態にします。2人の客のカードを名乗らせてから、はさまれているカードをリビールします。

Part 8 変わった予言タイプ

この Part には、ストップされたところに予言としてカード以外のものを入れるというトリックを収録いたしました。

スナップ

= デイヴ・キャンベル、"The Dave Campbell Legacy"、2004 年 =

このキャンベルのバリエーションでは、フォースするカードを客がデッキをシャフルしたあとに、デッキに加えるという、ある意味では古めかしい手口を使っています。そして他の色違いデッキから予言カードを使うため、マッチングペアではなく、同一カードを現しています。

* 準備 *

封筒の中に赤裏のダイヤのKと赤裏のクラブの5を入れておきます。青裏のデッキから、KD、X、X、X、5Cを抜いて、封筒の下に隠しておきます。

* 方法 *

相手にデッキをシャフルさせたあと、左手に受け取ります。封筒をデッキの上に持ち、中から予言カードを2枚出してテーブルに置きます。封筒はわきに置きます。セットされた5枚がトップにロードされました。

「このようにカードを置いて行って好きところでストップしてください」と説明しながら、4枚をカードを置きます。残りのデッキをその上に重ねます。

これでジェミニツインができる状態になりましたから、相手にデッキを渡し、やらせます。相手がストップさせたら、ボトムカードと同じ方に赤裏カードをディールしたカードにのせさせ、残りのデッキを上重ねさせます。もういちど同じようにやらせます。

デッキをリボンスプレッドして、両方の赤裏のカードを右隣りのカードとともに抜き出し、同じカードであることを見せます。

赤と黒の予言

= 加藤英夫、2012年4月19日 =

* 現象 *

赤いインクで”予言”と書かれたカードと、黒いインクで”予言”と書かれたカードを見せ、「これから選ばれる2枚のカードが、こちらの予言カードと一致するというマジックをやります」と言います。

デッキをシャフルしたあと、ディーリングして好きなところでストップさせ、赤い予言のカードをディーリングされたカードの上に置き、その上に残りのカードを置かせます。もういちどディーリングしてストップさせ、黒い予言のカードで同じことをやらせます。

デッキをリボンズプレッドして、それぞれの予言カードとそれの上のペアを抜き出します。

赤い予言のカードを指さし、「この予言のカードと同じカードが選ばれたでしょうか」と言って、赤い予言カードをひっくり返します。するとその反対面は、カードの裏面です。「ほら、選ばれたカードの裏と同じですよ。予言が当たりました」と言って、笑いを取ります。

「これは冗談ではありません。私は最初に、選ばれるカードが予言カードと一致するというマジックをやると言いました。ほら、予言カードは裏がこれで、表が赤で予言と書かれています。こちらは」と言って、ペアのカードの裏表を見せます。そのカードの表には赤インクで予言と書かれています。「ほら、一致しました」と言います。

同様に黒い予言のカードの方も一致していることを見せます。

「もしも他のカードが選ばれていたら、予言は当たりませんでした」と言って、デッキを表向きに広げると、他のカードはすべてブランクカードです。

* 方法 *

最初のシャフルは、トップとボトムにセットしたデュプリケートの予言カードを保持してやります。あとは通常のジェミニツインのやり方と同様ですので、現象説明通りに進めてください。

* 備考 *

フェースブランクではなく、ノーマルカードを使ってもできないことはありませんが、クライマックスのインパクトがまったく違うと思います。

Part 9 様々な現象

これまで解説してきた作品は、'ジェミニツイン'の現象の類型として、カードとカードがくっつくという現象のものでした。このPartには、ディール&ドロップによってそれらとは異なる現象を生み出している作品を収録いたします。

インビジブルペア

= 加藤英夫、2000年12月12日 =

これはマッチングペアが隣接して現れるものではなく、'パワーオブソウツ'系の、2組のパイルの同じ枚数目に現れるという現象です。

* 方法 *

シャフルされたデッキを受け取り、「透明人間というのは、いつも透明なわけではなく、ときどき見えたり、ときどき透明になったりするものです。カードの中にもそのようなカードがあるんです。この一組がどうなっているか見てみましょう」と話をして、表を自分に向けて広げていきますが、結果的にフェースカードと同数のカード2枚を抜き出して、テーブルの左の方に表向きに置きます。

その操作の中で、残りの1枚の同数カードを密かにフェースにシフトします。テーブルに抜き出す2枚は、異なる色の2枚とします。そして途中のどこでもいいですから、「これは透明になっているカードです」と言って、カードをテーブルの右の方に置く真似をします。それを2枚分を行います。カードをそろえて、デッキを裏向きに持ちます。

例として4のカードを抜き出したとします。そうすると、ボトムに色の違う2枚の4があることになりませんが、フェースにある4の色を記憶しておきます。赤だとしましょう。

左手を相手の方に伸ばし、まん中へんからカットさせて、上半分を相手に持たせます。そしてお互いのポケットをシャフルしようと言って、あなたはつぎのようなオーバーハンドシャフルを行います。1枚をランします。つぎはトップの1枚とボトムの1枚を同時に取る、いわゆるミルクビドルの取り方をします。そのあとは適当にシャフルし、最後の1枚をシングルで取ります。その結果、トップとボトムから2枚目に4のカードがあり、ボトムから2枚目の方が、記憶している色(赤)の4です。

2人のポケットをテーブルに並べて置きますが、あなたのポケットを右、相手のポケットを左に置きます。「このように同時にカードを取っていきますから」と言いつつ、左右の手で、両方のポケットのトップからカードを取り、各ポケットの手前に置きます。そのようなディールを続け、「好きなところでストップをかけてください」と言います。

ストップがかかったら手を止め、「こちらに見えている4を置きます」と言って、記憶している方の色(赤)の4を取り、左のポケットからディールしたカードの上に裏向きに置きます。「こちらには見えない4を置きます」と言って、見えない4を取る真似をして、右のポケットからディールしたカードの上にのせる真似をします。それらの上に前方にある各ポケットの残りのカードを取ってのせます。

ふたたび同じように両方のポケットから同時にディールし、ストップをかけさせます。そして、見えているもう1枚の4を左のポケットの上に置き、見えない4を右のポケットの上に置く真似をします。そして残りのカードをそれらの上にのせます。

「見えないカードが見えないままですと、面白くも何ともありません。このように魔法をかけると4のカードが見えるようになります」と言って、両方のポケットを表向きにして、フェースから同時に1枚ずつ手前にディールしていきます。同時に同じ色の4が出現します。それらをどけて、ディールを続けます。あとの2枚の4が同時に出てきます。

ダブルロケーター

= 加藤英夫、Card magic Monthly No.24 1999年6月4日 =

これは、U.F. グラントの'シュアロケーター'のように、表向きの数が示す枚数目から選ばれたカードが現れるという、ロケータートリックです。

* 準備 *

あらかじめボトムから7枚目に7のカードを表向きに、トップから4枚目に3のカードをセットしておきます。セットしておかず、7と3のカードを観客に見せてから、デッキの中に入れておくと言って、しかるべき枚数目に配置させてもかまいません。

* 方法 *

トップから4枚目のリバーサされた3の下にブレイクを作ります。「このようにカードを置いていきますから」と言いながら、カードのディールをスタートしますが、2枚ディールしたあと、つぎはブレイクの上の2枚をダブルディールします。そのあと2、3枚置いたところで、「好きなところでストップをかけてください」とセリフを続けます。

ストップがかかったら、ディールされたカードのトップカードを相手にのぞいて記憶させます。そのあと手に残っているカードをテーブル上のカードの上にのせてそろえます。

デッキを取り上げ、2人目の客に向かい、「同じようにあなたも好きなところでストップをかけてください。どこでストップをかけてもいいですよ」と言って、ディールをスタートします。ストップがかかったら、最後にディールされたカードをのぞかせ、手元のカードをその上にのせてそろえます。

何回かカードをカットします。リボンスプレッドして、表向きの2枚のカードがあるのを示し、それらのカードの数が選ばれたカードの位置を示していると説明し、それぞれのロケーターカードからその数だけボトム方向にカウントし、2人のカードを現します。

* 備 考 *

2度目は、2人目の客にディールさせてやらせてもかまいません。その場合は、1人目の客に対してディールしてストップさせるときに、2人目には自分でやってもらうので、よく見ていてくれと言って行きます。

ジェミニカルテット

= 加藤英夫、2008年11月5日 =

これはダブルディールで4つのパイルのトップからフォーオブアカインドを現す現象に、ディール&ドロップを利用したものです。

* 方 法 *

トップとボトムにAを2枚ずつセット、相手にデッキ渡して後ろ向きになります。ディールさせて、かなりディールしたらストップして、最後に置いたカードを表向きにさせ、その上に残りのカードを置かせます。それと同じことをもういちどやらせます。

前に向き直ります。デッキを受け取り、2組にディールしていき、表向きのカードが出たらストップします。表向きのカードは裏向きにしてボトムにまわします。

いま作った2つのパイルとは別に、あと2組にディールしていき、表向きのカードが出たらストップします。表向きのカードは裏向きにしてボトムにまわします。

そのようにしてできた4つのパイルのトップカードを表向きにすると、4枚のAが現れます。

オーストラリアンシックス

= ロナルド・ホウル、“Reputation Maker”、1971年 =

たいていのダウンアンダートリックは、ディール後に目的のカードが最後に残るように、そのカードをしかるべき位置に配置しておく、という構造から成り立っています。そのプレースメントの操作が、いかにマジシャンの意志にもとづくものでなく、ランダムなものに見えるかが、不思議さの源泉になってきます。

このマジックにおいては、相手がディールして好きなところでストップし、そこのカードをおぼえるという操作によって、ランダム性が印象づけられます。その操作の陰で、ディール&ドロップ

プが巧妙に働いています。

* 方 法 *

トップから2枚目と5枚目に黒の6のカードをセットしておきます。

「これからあなたにやってもらうことを説明します」と1人目の客に言います。「このようにカードを1枚ずつ置いていって、好きなところでストップしてください」と言って、トップから1枚ずつディーリングしていき、3枚置いたところでストップします。「そして最後に置いたカードをのぞいておぼえてください」と言って、最後にディーリングしたカードを少し持ち上げます。見る必要はありません。「そして手元のカードを上のにのせてそろえてください」と言って、手元のカードをディーリングしたカードの上のにのせてそろえます。

デッキを1人目の客に渡し、指示の通りにやってもらいます。1人目が終わったら、デッキを2人目の客に渡し、まったく同じことをやってもらいます。2人目の客が終わったら、まん中へんでカットさせます。

「一組の中には、不思議なパワーを持つカードがあります。黒い6のカードもそうです。それを探しましょう」と言って、トップからカードを表向きにディーリングしていきます。いまディーリングするパイルをパイルaと呼ぶことにします。黒の6が出てきたら、「6ですから6枚のカードを使います」と言って、その6のカードを「1」と数えてパイルaの左前に表向きに置き、その上にあと5枚のカードを「2、3、4、5、6」と数えながらディーリングします。

そのあとさらにカードを表向きにパイルaにディーリングし続け、つぎの黒い6が出てきたら、その6をパイルaの右前に「1」と数えて置き、その上にあと5枚のカードを続けて「2、3、4、5、6」と数えながらディーリングします。

左の6枚のカードを1人目の客に持たせます。右の6枚のカードを2人目の客に持たせます。そして2人にダウンアンダーをやらせます。最後の1枚が残ったところでストップさせ、相手のカードを名乗らせてから、最後のカードを表向きにさせます。

* 備 考 *

1人目の客には、最低6枚のカードをディーリングさせる必要があります。「つぎつぎとカードを置いていって、好きなところで止めてください」と説明しながら客にディーリングさせれば、5枚のカードを置かせるのは自然に行えます。

ドリームカムズトゥルー

= 加藤英夫、1999年2月12日 =

ディール&ドロップをキーカードプレイスメントとして利用しています。しかしながらこの作品では選ばれたカードを当てるためのキーカードではなく、相手が見つめたカードを認知するために働いているという、珍しい使い方がされています。現象を説明しておきましょう。

* 現象 *

相手が心の中で好きなカードを選びます。そのカードを念じることによって、テレパシーで当てるのですが、マークと数を同時に送ると難しいので、マークと数を別々に送ってもらうと説明して、つぎのような操作をさせます。デッキを表向きに持ち、思ったカードと同じマークのカードが出てくるまで表向きにディールさせ、同じマークのカードが置かれたら、そのカードを見つめて念じさせます。つぎは数についても同様に行います。それからマジシャンは相手が思ったカードを当てます。

* 方法 *

シャフルされたデッキのトップカードとボトムカードをグリップスして記憶します。

相手に心の中で任意のカードを決めさせます。「あなたが心で思っているカードを当てるには、テレパシーを使うしかありません。あなたはテレパシーでカードを伝えたことがありますか」とたずねると、相手は否定します。「慣れていないとカードのマークと数を同時に送るのは難しいですから、マークと数を別々に送ってもらいます」と言って、デッキを表向きに相手の左手に持たせます。

「私が後を向いたら、カードを表向きに上から1枚ずつテーブルに置いていって、あなたの選んだカードと同じマークのカードを置いたところで、手をストップしてください。もしも1枚目のカードが同じカードなら1枚だけ置くこととなります。ストップしたら教えてください」と言って、後を向きます。

相手がストップしたら、「いまテーブルのいちばん上にあなたの選んだのと同じマークのカードがありますね。そのカードのマークに精神集中してください」と言います。しばらくして、「どうやらマークがわかりました」と言います。「手に残っているカードをテーブルの上のカードにのせて、全体を取り上げて、また左手に持ってください」と指示します。

「こんどは同じように1枚ずつテーブルに置いていき、選んだカードと同じ数のカードを置いたらストップしてください」と指示します。相手がストップしたら、最後にディールしたカードを見つめて精神集中させます。しばらくしたら、「あなたのテレパシーはかなり強烈ですよ。手に残っているカードをテーブル上のカードにのせて、全体を取り上げて、裏向きにしてください」と指示します。

前に向き直ります。相手にデッキを何回かカットさせます。デッキを受け取り、「あなたのカードを

抜き出します」と言って、表を自分に向けて広げ、2枚のキーカードを探します。最初にトップカードだったキーカードの左のカードがマークを示しており、ボトムカードだったキーカードの左のカードが数を示していますから、そのマークと数のカードを抜き出して、相手の前に裏向きに置きます。相手のカードを名乗らせてから、そのカードを表向きにします。

カードを見ないカード当て

= 加藤英夫、2012年6月9日 =

ディール&ドロップをキーカードプレイスメントとして利用すると、2枚のカード当てに応用するやり方はいくらでもあります。その中でもっともパワフルな使い方説明します。

* 方法 *

サイドが少し狭くされたサイドショートを2枚使います。2枚を隣接させておいて他のトリックを演じたあと、それらがトップとボトムに配置されるようにカットします。右にいる客を1人目の客、左にいる客を2人目の客として扱います。

1人目の客にデッキを渡し、後向きになります。ディール&ドロップのやり方で、その客にカードをおぼえさせます。それから2人目の客にデッキを渡してもらい、その客にも同じやり方でカードをおぼえてもらいます。左手を背後に伸ばし、デッキを受け取り、前に向き直ります。

前に向き直ったら、すぐ左手で上のサイドショートの下で分け、チャーリエカットします。このとき右手はつぎのセリフを言いながらジェスチャーさせて、観客に見えていることが重要です。すなわち、このあと右手を背後にやってすぐ前に出したときにカードが持たれていることが、このトリックの肝(きも)であるのです。

「お2人にカードを選んでいただいたとき、私はカードの方を見ていませんでした。ですから選ばれたカードを当てるのも、カードをいっさい見ないでやることにいたします」と言います。

このセリフが終わるまでに、左親指は2枚目のサイドショートまで弾き、その下に大きな分け目を作っておきます。「では瞬間的に当てます」と言って、右手を背後に運び、分け目の下のカードを抜いて持ち、前を出して「これがあなたのカードです」と言って、1人目の客の方にさし出します。そして左手を前に出しますが、トップカードを押し出してなるべく指先で持つようにして、左の客の方にさし出し、「これがあなたのカードです」と言います。

それぞれの客に選んだカードを名乗らせてから、左右の手のカードを表向きにします。

ポストカード

= マイケル・サイバーンセン、“Linking Ring”、1999年11月 =

* 準備 *

トップから1枚目、7枚目、8枚目、そしてボトムにAをセットしておきます。ポストイットを4枚使います。

* 方法 *

3人の客にポストイットを1枚ずつ渡します。矢印の部分が糊面なので触らないように注意します。

「皆さんにやってもらうことを、まず私が実例をお見せします」と言って、デッキを右手に持ち、トップから1枚ずつ左親指で引いて取っていきます。「そして好きなところでストップをかけてもらいます」と言って、6枚取ったところでストップします。「そこにポストイットを置きます」と言って、いったん右手のカードをテーブルに置き、ポストイットを1枚取り、左手のトップカードの上に図1のようにポストイットを置きます。糊面を上に向けます。そしてテーブルからカードを取り上げて、左手のカードの上に重ねます。図2。押しつけてポストイットがAにくっつくようにします。



第1の客に向かい、左手でカードを取っていき、ストップをかけさせてストップします。左手のカードの上に糊面を上にしてポストイットをのせてもらいます。その上に右手のカードを重ねます。

第2の客に向って同様にカードを左手で取っていきませんが、1枚目を取るとき、同時にボトムカードを引いて取ってしまいます。そしてストップがかかったらストップし、左手のカードの上にポストイットを置かせ、その上に右手のカードを重ねます。

第3の客に対しても同様に行います。これでポストイットは各Aにくっついていきます。左手でフェースを客に向けてデッキの上下エンドを持ち、右手でポストイットを引っ張って4枚を抜き出します。それらが4枚のAであることを示します。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第3号

発行 2012年7月1日

著者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

